看護婦の継続学習に関する報告（2）

——働きながら大学に学ぶ看護婦の動態からみた継続学習の在り方——

外口玉子*・中山洋子*

1. 前回の報告（要約）

本来，看護婦としての成長の基盤は，日々の仕事の中での看護体験から，その意味するものを学びとる力を，個々の看護婦がたかめていくことによって築かれるものである。それゆえに，看護婦の継続学習の在り方をみつめていこうとする報告者らは，看護婦がそれぞれの場における自分自身を直視することを回避せず，自分の行なっていることを自覚し，看護における価値や信条を看護婦仲間とともに共有しあっていく方向を目指して，学習し続けることを望ましいと考える。そのためには，まず，“今，現在，看護分野のどの層がどのように動いているのか”“どのような人々がどのような問題を抱えて悩み，模索しているのか”を見つめ，現状を把握する必要があることを痛感した。

そこで，今回は，“看護内部から外部に出ていって学習しようと既に個々に動機づけされている人々”，すなわち，個々の看護婦の選びによって大学教育を自発的に履修している看護婦の存在を明らかにし，これらの人々がいかなる状況・条件のもとでこの学習形態をとっているかについて，その実態を把握することを試みた。なぜならば，看護の場から離れて学習しようと動機づけられた人々が直面していることがらを通して，看護婦の成長に対して看護の行なわれている場に内包されている問題を逆に浮び上らせることができるのではないかと考えたからである。そこから，さらには，看護婦の基礎教育と現任教育の有り方を検討するための資料を得られればと考えた。

その第一段階の作業としては，明治学院大学Ⅱ部に学ぶ現任看護婦（士）（在籍中の者，および過去5年間に卒業した者を含む）を対象に，郵送法による調査を行なった。

その結果，報告(1)では次の諸点が明らかとなった。

1) 大学の進学の動機からは，一般社会における看護への評価の問題を含めて，“毎日の業務に埋没”していたくないといった看護の「自認」の問題が提起されており，看護の仕事自体の魅力を発見できないでいる悩みを感じとるこ

* 東京都精神医学総合研究所　医療看護研究室

とができる。

2) 大学進学時の障害としては，主として退職，転勤，休職，配置がえなど職場調整の問題と経費の工面の問題が提起され，看護現場からのこうした学習への支えと理解の貧弱さがうかがえる。

3) 継続学習の理由には，進学への堅い決意と大学生活を送る自分への期待が決意の底に流れていることがうかがえる。

4) 学習継続の障害としては，経済的問題よりも優先して“基本的な生活のバランスのくずれ”についての訴えが圧倒的に多い。

そして，これらあらゆる面のゆとりのなさの中で，進学時年齢が24歳をピークとして，ほとんど20代であることは，臨床経験3年後の“看護の中の渇望”の大きさがうかがえると同時に，女性にとっての人生設計の分岐点とも思われる時期に，大学進学という道をとらせる内発的な学習への要求の大きさは，重視するに価するものであろう（この詳細についてはすでに「看護教育」Vol. 16, No. 1, 1975年1月，「看護」Vol. 27, No. 1, 1975年1月，において報告した）。

2. 報告（2）をするにあたって

前回の報告は，いわば“対象者が直面している問題とそれを克服するに必要な支援（Support）は何か”との問いにそって作成した質問項目に対する回答を，量的に考察したものであった。

しかし，現実の重さは，これら質問項目への画一的な回答には，到底含みきれなかった。そこで，次の段階として，回答者が自分の言葉で表現した調査用紙の「自由記述欄」の内容を検討し，考察を試みた。

その中で，“対象者が看護という職業や職場に働く自分の仲間をどのように見，自分がめざした学習への障害をいかにうけとめ，学業との両立にいかなる努力をしているか，そして，どんなことが学習継続への支えとなり得るのか”についての多くの示唆が得られた。すなわち，当事者が必要とする支援への本質的な問いは，単なる学習継続上の困難さについてでは決してなく，その1人1人にとって，学習の継続が何を意味しているのかをみつめさせるものでなければならないことがわかった。

そうした意味あいをふまえたうえで，さらに次の段階として，回答者との直接の話し合いの場を設定し，先の「自由記述欄」に関する調査資料を検討の素材として考察を深めることとした。

第1回の話し合いは，報告(1)を回答者に送付した後に行ない，15名の参加者を得て，調査用紙に記述しきれなかった，さまざまな体験を出しあった。その席上での定期的な会合をという要請をうけて，第2回の話し合いが行なわれた。ここでは，第1回の話し合いの内容が討議資料として提供され，加えて，明治学院大学以外の大学において同じように働きながら学び，現在もなお，看護婦として病院に働き続けている者，2名が話題提供者として参加した。

これらの直接の話し合いの場においては，主に“回答者個々の生活史の中で明治学院大学に学んだことはどのように位置づけられるもの

か，また，どのような意味あいをもつものなのか”について，それぞれが，今現在の自分の中に，捉えなおすことを試みた。

報告(2)では，以上のような「自由記述欄」のまとめや話し合いなど，調査対象者の生の声が反映するような資料を提示し，“わが国の看護婦の現任教育全体の中で，夜間大学に学ぶことは，どのように位置づけられ，どのような意味あいをもっているのか，また，看護婦基礎教育の実状との関連において，それぞれが何をいえるか”ということに焦点をしぼって，報告者らの見解を述べてみたい。

3. 「自由記述欄」，「話し合い」の中から得た調査内容

3—1 調査用紙の「自由記述欄」の中から

これは，働きながら学ぶ看護婦の実態を，質的に考察するために，調査用紙の中から，回答者による自由記述の項を整理し，まとめたものである。

---

1. つらさ

——時間の足りなさ—仕事と学業のバランス—体力の限界の間で——

働きながら学ぼうとするとき，まず第一に直面する問題としては「大学へ行く時間調整に関すること」，すなわち，仕事が時間通り終えられるかどうか，時間通りに終えたとしても通学時間との関係で1時間目の授業に間に合うかどうかなどがあげられよう。

○企業健康管理室　保健婦〔4年生〕

勤務時間と授業時間とがあわなくて毎日40分近い遅刻。テストのときは6時開始だけど，それでも間にあわず，年休をとって出てくる。テストのときだけでも10分～15分の早退ができればと思う。

○私立病院　看護婦（在学当時）〔1970年卒〕

入学したものの勤務時間と通学時間との調整で苦労した。準夜勤はできないし，残業もできず，かといって自分1人ばかりの都合もいっておれないし，大学を休む時は非常につらかった。

○共済組合病院　看護婦〔4年生〕

看護婦の仕事にはくぎりがないので，けんめいにすればするほど帰れなくなり，とくにリーダー的役割についたとき，1時間目を欠席や遅刻をしてしまう。どうしてもとらなくてはならない単位の科目のときは，目をつぶっても勤務時間がすぎたら帰ることにしている。そのため，休みのときや学校のないときは残ることにしている。

○高等看護学院　専任教員〔4年生〕

現在の職場に勤めるとき，30分早く帰ってよいという条件で契約し，上司や同僚も気を配ってくれるが，気を配ってくれればくれるほど，かえって気がねしてしまう（ぜいたくなのかもしれない）。つらさは単に時間的な問題ではない。いま，いわれたように，周囲の人々（上司・同僚）との関係や職場の雰囲気を含んだ職場環境でもあるようだ。

○大学病院　看護婦〔3年生〕

同僚，上司にできるだけ迷惑をかけないよう，時間内は精いっぱい働くようにして，同僚との交際は学校が休みのときにできるだけするようにしている。

1年のとき，患者さんの状態が悪いときや手術が遅くなるとき，医師より病院にいてほしいとよくいわれ，主任である私は学校に行きたくてもなかなか行けなかったし，スタッフの教育（皆と一緒に勉強すること）が時間がないためできなくてジレンマにおちいった。

○共済組合病院　看護婦〔3年生〕

（職場の上司，同僚は通学に協力して下さり申し分けないと思うが）思いやりの言葉からと思うが「学校に行っている人が……」と勤務時間外の行事etcのことに対しいうのが，精神的に負担になる。勤務時間はちゃんとするのだから時間外のことは干渉してほしくない。「学校に行っていると疲れるでしょう？」「学校に行っていると……」といわれるのは，勤務をさぼっているように見られているのではないかと逆に

気をつかう。

○国立療養所　准看護士〔2年生〕

仕事・健康を優先させ，十分な休養・栄養をとるよう心がけている。仕事あっての学校だと思う反面，学校に自分の将来をかけているのでジレンマにおちいりやすい。

○国立病院　看護婦〔1年生〕

宵勤（17:00〜00:30）の勤務ができないので，当然明勤（00:30〜8:30）が多くなり，日勤→学校→明勤ということも多々あるわけですが，非常に疲れてしまい，頭の働きが鈍ってしまうため，大事をおこしたらどうしようもないという不安があります。勤務を優先するため，休む（学校）ことも他人より多くなり，勉強も遅れがちです。大学で勉強することに楽しさを感じない所以がここにあるのだと思います。

働きながら学ぶ看護婦は，学ぶことによって仕事がおろそかになるのでは，という負い目をもっている。しかし，その負い目をはらいのけ，努力しようとすればするほど，その努力に伴って生じるつらさにぶつかってしまう。さらに，時間のなさ，ジレンマ，負い目，不安，疲労のなかで，つらさは学ぶことそのものに対する疑問へとつながっていく。

○高等看護学院　専任教員〔2年生〕

学ぶ以上，真剣にとりくみたいのだが，現在では職場優先のため何のために学校に行っているのかと考えるときさえある。

○大学附属病院　看護婦〔1年生〕

仕事がきつい上に通学時間がかかると，つい疲れると足が遠のいたりしてしまい，自主的に学ばなければならないのが，なかなか時間がもてず，夜学の大変さをつくづく感じ，なぜ自分がこんなにまで……などと思ってみたり，ときどき目的すら見失なうことが多々あります。

2.　直面する困難とそれを支えるもの

多くの者は「遅刻」，「時間的に余裕がなく予習ができない」，「自分の体力・能力の限界」，「同僚への迷惑」から「継続の自信が失なわれた」，「受身の自分に焦りを感じた」，「単位取得のためとしか思えずむなしい」，「学校へ通うことが無駄なことに思え，やめてしまおうと考えた」などの困難に直面したと記述している。また結婚問題で悩んでいるという者もいる。

こうした危機的状況を乗り越える手だてとしてあげていたものをみると，他者の援助を求めていくか，自己の精神力によって克服するかにおおまかにいって二分することができよう。

よせられた回答をみると，前者の場合には，ともに働きながら学ぶ学友たちと話し合い，協力しあい，互いにがんばる姿をみて支えあい，困難や危機をのりこえている者が多い。後者の場合には「自分の目的達成への決意」や「初心貫徹を自分にいいきかせること」により危機をのりこえているが，「何が自分の支えになったのかわからない，ただ苦しいことのみ」と述べている者もいる。また宗教（宗教的なもの）が支えとなったとするものもある。ここでは，特に報告者らに印象的であった後者の場合に焦点をあて，いくつかの記述をあげてみよう。

○国立療養所　准看護士〔2年生〕

困　難：1年前期
仕事と学業の両立のため無理して3日間寝込んだ。上司・同僚に負担がかかり，これから両立していけるだろうかと不安になる。

その時：上司・同僚が心配してくれた。最終的には気力，意欲でがんばり通した。

○法人病院　看護婦〔4年生〕

困　難：入学後4カ月目
試験勉強の時間が少なく，語学の出席日数も少ないため継続の自信が失なわれた。

その時：困難をどこまで克服できるか挑戦してみようという意気込みをもち，学友の学んでいる姿が励ましとなった。

○国立療養所附属看護学院　学生〔1年生〕

困　難：1年1学期
試験やどうしても大学に行きたいときも都合がつかない。

その時：どうしようもなくて単位のとれないこともじっとがまんした。

○高等看護学院専任教員〔1971年卒〕

困　難：寝不足が仕事に影響し，ミスをおかしたとき，先輩から指摘されて情けなくなった。

その時：上司・先輩から皮肉をいわれると何くそと思い，頑張り通すことができたのではないか，意地と気力。

3. つらさを乗り越えさせるもの

つらさや困難さなど働きながら学ぶものにとっての共通した気持ちは，どのようにして乗りこえられているものであろうか。学んでいることの意味をどのように受けとめているのだろうか。「学んでいてよかったと思えることはどんなことか」の質問項目を整理してみると次の6つの事柄にまとめることができた。

(1) 学ぶことのおもしろさ
(2) 取り組んでいる自分の成長への関心
(3) 視野の広まり
(4) 看護を距離をおいてみられる
(5) 職場にない雰囲気を知る
(6) 働きながら学ぶ仲間と知り合える

以下これらについての具体的記述をいくつかあげてみよう。

○公社病院　看護婦〔1971年卒〕

勉学はいくらしてもし足りないことを学んだ。

病院という施設内での看護というものを他の分野からながめられたこと，他の多くの分野との関わり合いを少なくとも多少は理解でき，物を多面的にみつめることができるようになったのではないかと思う。

○都立病院　准看護婦〔3年生〕

自分の目的とするところの裏づけがなされていくということの喜びがあったこと。学ばざるはいやしという言葉があるが，学び舎の雰囲気はなんともいい。友達が何らかを求めている姿勢は私をますます意欲的にさせるし楽しい。

○高等看護学院　専任教員〔4年生〕

異なった環境にあったものと知りあえる。それによって自分を冷静に客観視できる。教養課程を終えて高年次になると，専門的な領域に入り，自分の興味あるものに焦点を定めることができる。

友人はもとより，大学教授の個性にふれ，その個人と知識の積みあげにふれ知識欲がでてくる。また曖昧な了解や妥協で人間関係を作ってはならないことを『言語』を学ぶことによってわかりかけてきたこと。

○国立療養所附属高等看護学院　学生〔1年生〕

今まで看護ばかりで専門バカ的でした。これからは普通の女の子としての感覚をもっている人達と接していけることがよかったと思います。そんな中で，一般的な教養ある女性として看護をしてゆきたいと思っています。

○大学病院　看護婦〔1971年卒〕

一つの学問を系統だてて深く学ぶことはできなかったけれど，その足がかりだけは得られたと思う。今思えばあれもこれもと，もっとやりたかったことが多く，悔やまれるけれども，手段はあるという力づけを与えてくれる。また，まったく異なった職場での仲間の存在を身近に感じたり，社会問題・学生の政治活動に関しても入学前よりやはり広い視野で考えられることもできたと思う。

○国立病院　看護婦〔4年生〕

看護という一分野で働いてきて，閉鎖的な集団での生活（寮職場 etc）をぬけ出て外界の人とわれわれの職業へのみかた，期待などが膚を通して感じられたこと。

○国立療養所　准看護士〔2年生〕

自分も大変苦しいが自分以上の劣悪なる条件で働いている仲間，障害を克服して学んでいる学友をみるにつけ五体満足の自分がいい加減な気持ちでいると恥ずかしくなる。

○私立病院　准看護婦〔1年生〕

職場の中での生活にはない考え方・雰囲気にふれることができ，よかったと思える。

4. 看護教育の問題点

この調査の最後に設けた「その他気づいたことは何でもお聞かせ下さい」の項に記述されたことをみると，いま自分のおかれている状況を看護教育との関連の中で考え，感想を述べている者が目立つ。ここでは，自分の受けている大学教育とかつて受けた看護教育とを比較しながら，現在の看護状況についての印象を述べているものをいくつかあげてみた。

○企業健康管理室　保健婦〔3年生〕

看護学院は，自主的に研究・学問をしていく場ではなく，ただ教え込まれ，養成される場のような気がする。看護という学問をもっと深め

るためには，もっと自由な考え方の中での教育が必要ではないか。

○都立病院　助産婦〔1年生〕

やはり看護学校と比較すると大学はなんとマスプロであろうと思う。何か暖かさのないサバサバした感じをもつ。自分がやらなければだれもしてあげない（あたりまえのことであろうが）というように，個というものがとても大切にされているように思う。

でも大学の教養課程だけを見ている範囲では，別に看護学校，保助学校とて劣るものではないとつくづく感じます。なぜこのように大学と同年代を，各種学校ですごし，また大学へ入学せねばいけないのだろうとなさけなくなるときがあります。本当に看護学校というものは，なんだったのだろうと考えさせられます。つまらないですね，同じようなことをしなければいけないということは。

○法人病院　看護婦〔4年生〕

疾患の看護ではなく，広い人間の看護に従事する看護婦は，専門的知識の他に深い人間性が必要とされます。そのためには，教育制度は大学教育制度に絶対すべきである。そして医師も看護婦も同等の一般教育課程を受けたのち，各専門専攻科へ進路を決められるような高度の教育制度を望みます。

○企業附属病院　看護婦〔1年生〕

看護短大での2年間，看護の面で考えさせられることが多く，学び続けることの大切さ，あるいはまた，現在の看護教育の不満も重なって大学へ行く決心をしました。知識の一方的なつめこみ式の教育（少なくとも短大ではそうではありませんでしたが），現在の看護教育のやり方では，抑圧的で，中学や高校の延長のような，もっとそれより狭すぎるような気がするのです。

テストにしても，丸暗記で事足りるようなのではなく，学生のときにもっと大切なことは，学生に創造的な力をつけることではないかと思いはじめました。大学ですと自分で学び続ける態度が身につくにもかかわらず，看護学校などでは，そのような機会も少ないとおもわれ，結局卒業すると現状埋没型で，何の本を開かなくとも事足りる魅力のない看護婦になっていくのだと思います。

よく病棟の中でいろいろなことを提案するのですが，「卒業したてであるからそのようなことがいえる」とか，がっかりすることばかりです。もっと考えるナースが多くなってこないかぎり看護はいつまでたっても機械的処置におわれてしまう技術屋のような気がするのです。

○共済組合病院　看護婦〔3年生〕

卒後教育の問題が最近取り上げられているが，一部の管理者の中には看護婦は勤務以外は寮にいて，勤務のための体調をととのえるべきだという考え方を持つ人がいる。その人達にいわせると，学校に行くということは，それだけ勤務において楽をし，勤務外で全力を出しているということらしいが，多くの友達に聴いてみると決してそうではないのである。あらかじめ試験期日を申し出てあるのに，その日に準夜勤をつけたり，代休さえも2週間以上くれないなどのことをすることもある。何かを学ぼうとするとき，その頭を打ちくだこうとする体質がまだ看護婦の間にあるのではないだろうか。

一般大学で学んでみて，看護学校のカリキュラムの乏しさに驚く。一般教養なども自分の選択で選ぶ余地を与えるなど個人をもっと尊重して欲しいと思う。実現において問題もあると思うが名前だけ短大・大学にするのではなく，内容的にも大学並みにしてほしいと思う。

5.　働きながら学び続ける看護婦のさまざまな思い

4.と同じ「その他気づいたことは何でもお聞かせ下さい」の項から，いま現在おかれている立場からの種々様々な発言をひろってみた。

●大学を卒業すると同時にソーシャル・ワーカーになった人々の声

○（元）研究所　准看護婦

この調査票記入につき，当時の気持を思い出すことができてよかった。過去の気持もうすれがちであったが，現在の自分の位置・存在はやはり大学生活があったからこそなりたっているのである。准看として勤務していたときよりも現在医療ソーシャル・ワーカーとして，勤務しているときの方がより充実し，働き甲斐がある

ように思っている。現在再度看護婦として勤める意志はまったくない。

○（元）国立病院　看護婦

卒業後，看護職を離れ，また職場をかえてみて看護婦を外から（客観的に）みつめることができ，もう一度看護婦になるとしたら前とはちがった働きかけ（患者さんへの）ができるような気がする。

●大学を卒業し看護分野で仕事をし続けている人々の声

○（現）高等看護学院　専任教師

結局は人間に対する見方，人間への興味をすべての学問が深めてくれたと思うし，このことが人間とのかかわり合いの中にある「看護」にたずさわる者として役立っていると思う。

もちろん無駄な時間もあったが，今では人生には無駄も必要というような気がするし，大学というところは本人の考え次第で非常に意義あるものになると思う。

○（現）大学病院　看護婦

私が入学できたのは，推せん入学制度があったため。希望の大学・学部は他にあったが，それぞれに入試という関門があった。勉学の意欲はあっても，長年受験勉強から遠ざかっていた者にはやはり壁は厚い。

看護婦，保母といった福祉関係で働いている仲間が多く，その点からも，これら特殊な教育（養成所という機関）を受けている者がなぜ就職後数年たって大学という場で勉強したいと思うのかを考えさせられた。その原因の一つに今の看護婦，保母などの教育制度に対する物足りなさがあるのではないかと思う。

いろいろな要素から入学したが，自分だけの問題として大学の門をくぐり，卒業したということがある種の自己満足にあったことは否定できない事実でもある。

○（現）公会病院　助産婦

看護という学問追求への道には考える魂を育成していないと思われる。看護の発展への原動力は，鶏か卵の議論もありましょうが，教育に関してはやはり最初が大切であると考える。

●いま学び続けている人々……

○大学病院　看護婦〔1年生〕

現在，大学での勉強も人間関係も比較的スムーズにいっており，毎日毎日がどんなに疲れても楽しく充実しているのですが，このごろ"それだけでいいのか？"という疑問がおこっています。

看護職にある私は，病院という狭い組織の中でのみ医療をみるのではなく，もっと公衆衛生という立場からもう一度現在のあり方を反省しようと思い大学へ進みました。しかし，何を目ざさなければならないかわからない。問題意識がない，私が物事を知らなさすぎるからだと思い，今後にかけている。

○私立病院　看護婦〔4年生〕

卒業するにあたり，看護婦を続けていくべきなのか別な職業についた方がいいのか……迷っていることは，その中にかなり離れがたい何かがあると思います……。それが何なのか私の心の中ではっきりした形にはなっていないのです。できないでいます。それは，私1人だけの感情なのか，他の看護婦の中にもある共通のものなのか――，これをはっきりさせると，今まで学校で学んだことが役立つことになると思うし，それなりの実践を伴って言葉で表現したいということは看護婦を続けることになるわけですが，このようなことで今どのようにするか悩んでおります。

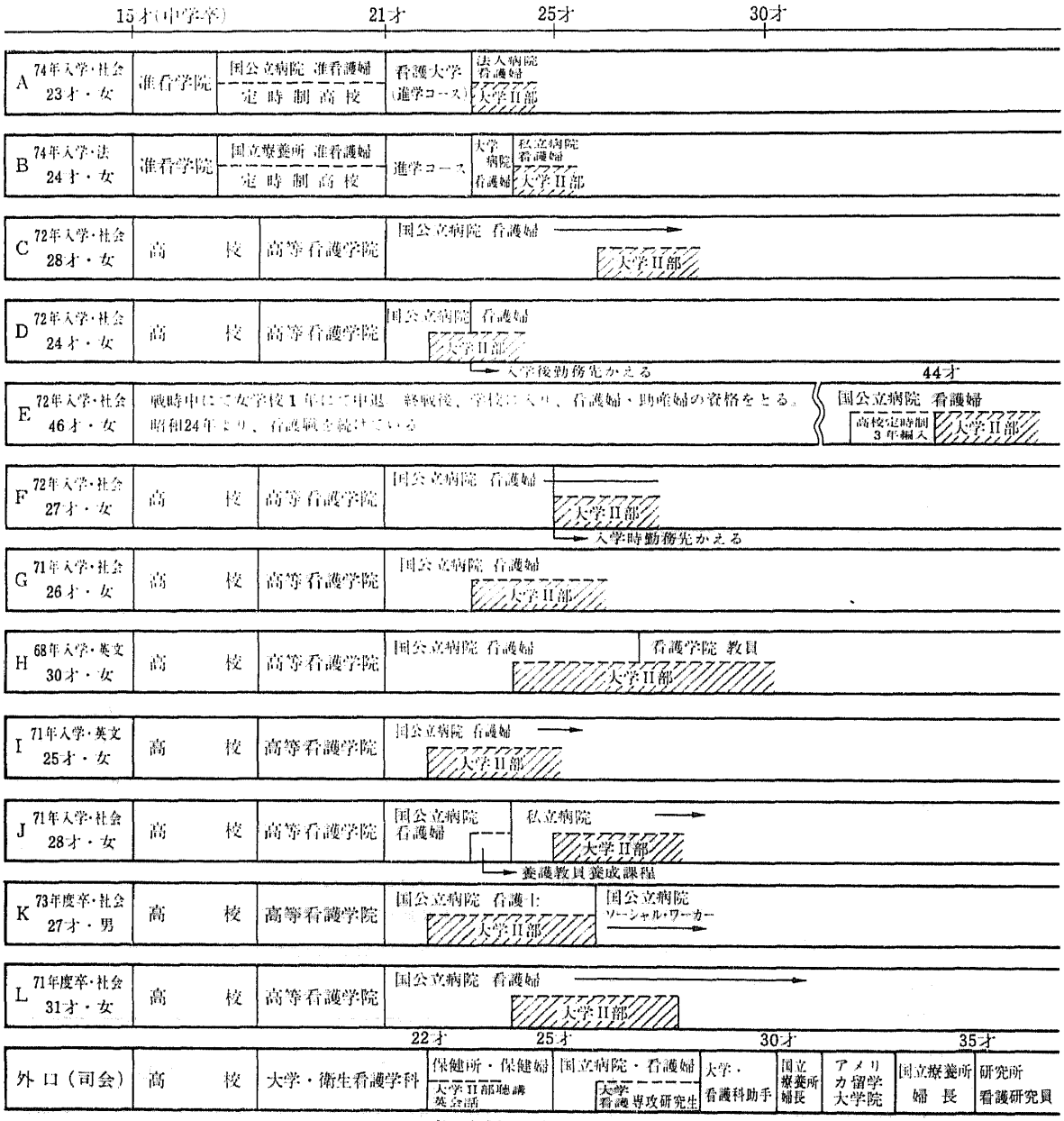
看護に関することでいつでも相談にのりますという機関が必要なのかも知れません。特に大きな病院でない小さな病院，機関にいるものにとって必要と思います。その中味はむずかしいと思いますが……。

3―2　第1回の話し合いの中から

第1回の話し合いは，報告(1)を回答者に送付した後に行ない，3―1で提示した調査用紙の自由記述欄のまとめを討議資料として，調査用紙に記述しきれなかった，さまざまな体験を出しあってもらった。

この話し合いには，報告者らを含め15名が参加した。表―1はその時の参加者の中でアンケ

表—1　第1回話し合い参加者の経歴（1974年7月現在）



注1）国公立病院の中には、大学病院、逓信病院、共済立病院なども含む。

ートの対象となり，回答をよせていただいた12名の方々と司会者（報告者）の経歴を表にしたものである。これにより，発言している方々が，どの時期に大学で学んでいるかが明確になると思われる（この話し合いは昭和50年10月18日に行なわれた）。

＜この話し合いに期待するもの＞

外口：アンケートの調査用紙の中では，書きずらかったとか，あるいは項目がなかったり，書くことがもどかしかったり，とかあったと思う。ホ

ンネなんかは，もっと人が知りあわなければ，いえないようなこともあると思いますので，もう少しこういう点があるんだという意見でも，ぜひ出していただけたらと思います。

看護の仕事に動機づけられていくには，それぞれいろんな屈折があると思う。あるときには，すごくその仕事の魅力にかられたり，あるときは，何かのがれたいような気がしたりということがあると思うんですが。そういう意味で，なかなか調査用紙に出ない，１人１人の内的な動機みたいなものを出していって看護の問題というか，看護の中に内在している問題を考えていきたいと思う。ですから，自分はこんな気持をこのぐらいの時期にもったとお話していただければ，いいんじゃないかと思います。

＜なぜ，このような調査研究を思いたったか＞

外口：経過みたいなことを少し報告したい。

私のまわりに夜間部にいっているナースが，多かったんです。その人たちが，すごく熱心，熱心というか要するに自分の時間でやっている。そのとき，自分から学習しようとしている人たちの存在が公認されていなくて，看護の中では活用されていないような感じがして……。

で，決定的なことは，婦長をしていたときのことです。"ニッパチ"がいわれてきて，夜勤，準夜勤をぬける人が問題になったわけです。その頃，准看の人を高校に通わせるという約束で，就職をうけていたんですね。だから，１病棟でたくさんかかえると収拾がつかなくなるわけです。

いろんな意見がでたそのときに，ある婦長が，自分は高校へ行く人を優遇したい。なぜかというと，高校へ行く人は，将来，高看になるためのベースとしての高校だから，看護界がもっと協力してもいいから，その人たちを最優先しよう。だけどそうじゃない人たち，夜間大学とかあみもの学院とかに行っている人は，看護婦として働いているんだから，という話が出たんです。そのとき，私が，そうではない，いろんな意味で教育というものは目にみえなく還元されるものだから，自分から努力している人の存在を明るみに出し，だいじにしないからいけないのであって，もっと婦長がそれに対して考慮してもいいのではないかとかなりやりあったわけです。学ぶことに優劣はつけられないから，あみもの学院であろうと，その人の生涯教育の一環であろう。それをわれわれの方のエゴというか，どっちにすぐ役立つかということで評価しようとすることはできない。教育というのは，外側から評価されるものではないとがんばったら，あなたは大学へ行く人の方をかばいますねといわれたこともあったけど。

そういうやりとりがあって，気がついたら，自分は確かにそういう存在なわけ。わたしのところに相談にきたり，保証人になってほしいと頼みにきたりする人たちというのは，大学に行こうとする人たちで自分では気がつかなかったが，確かにその人たちを一生懸命カバーしていた。例えば，看護の論文を一緒に読んで受験英語の勉強したり，勤務中，一時間早く帰すことなども気にせず，時間休などにしなかった。そういうことが目立っていたんですね。

ふりかえってみると，いろいろなことがありました。私としてはどういう学習に動機づけられている人々がどんなふうにいるか，あるいは，その人たちの苦労をそのままにしといていいのかどうかというのを疑問に思って何とかそういうことをいってみたいと思ったんです。私が代弁すると，私の個人的な何かうしろみていわれてしまう。だから直接いま学んでいる人たちから意見をもらえるような場をつくればもう少し説得力もあるんじゃないかと思い，それでそういう人たちと共同研究をしていけば，非常にいいんじゃないかと思って……。

そんなことで，看護協会の教育問題の委員をひき受けたんです。看護協会がどういう方向をめざして専門職能団体として活動していくかというとき，働きながら学ぼうとする人たちに，論文を書くときとか，図書を利用したいときとか，そういうときに資源を提供したり，何か保障をしたりするような，そういう方向にいってもいいんではないかと思ったんです。

また，看護の中でいろんな絶望や渇望があって外へ出ていく人も，それはそれなりに社会に還元されているわけだから，何か看護の中に自分を要されているんだということをお互いに確認し合えるような方向になるように，専門職能団体からの

働きかけがあっていいのではないかと思ったんです。

そんないろいろな想いが，結局，看護婦の継続学習に関する報告ということで出した研究の経過です。

K：ボクの勤めている病院では，男性が多くて，結構みんな大学に行っている。ボクもやめるときだいぶ総婦長から皮肉いわれたんです。"あんた何のために大学へ行ったの"……と。上司は何か大学を出ればすぐ他の職種にかわってしまうんじゃないかというようなそういう気持をもつわけです。大学に行った者は，かわりたい，婦長になりたいとか希望をもつんですけれども，受け入れ側は，大学へ行くやつは職場をどうせ離れるだろうという見方なんです。大学に行くのは自分に何らかのつらさというものがあるからで，そういうことを考えれば，何とかそれを追求してほしいと思う。看護士の仕事をしていて大学に行くということは，確かに自分自身のプラスになるかもしれないけれども，他の人，患者や職場の人々などにも，間接的にはプラスになっているのではないだろうか。

A：私のいるところも外口先生がいわれたと同じことがあるんです。いま病院で大学へ行っているのは私1人だけなんです。病院が小さいこともあるんでしょうけど。一番最初，大学に入ったとき，ものすごく病院内でいろいろな抵抗があった。進学コースの夜間に行っている人たちが病院の中に何人かいて，婦長さんの話だとそういう人たちの場合は準夜勤というのは免除してあげて当然だ。彼女たちはいずれ卒業したら病院の中に残るし看護婦になる道だから。私の場合は特別だというようないい方をするんですね。そのことに対して私は最初のころはいろんなこといってきたんですけど，1人じゃどうにもならないような何かがあって。そのうちに普通の日でも準夜勤つけるんです。だから個人交代してもらうんですけど。何か現実問題みたいです。

D：個人交代はわりとスムーズにできますか。

A：そのへんは，普通の準夜勤をつけた場合は個人交代をしてもいいということを前提としてつけるんです。そんなら最初からつけなければいいと思うんですけど，それをわかっていて……。

E：1人くらいならできそうですね。うちはいま産科に2人いてほとんどみんなと同じように勤務表つくるんです。だからやっぱり個人交代しなければならない。やたら"疲れた"とか何かいうと"あんた余分なことをやっているから"というふうにみられてしまうんです。

だからそういうことではなく，自分で何とかしなくてはとやって疲れても，仕事の方で疲れたとしても，皮肉めいたこというんです。婦長さんの方が。私としては1人でも多くの人がなるべく勉強していくということは，患者さんの方にもいろんな面で還元していきますし，そういう意味で勉強するということは大切だと思う。何か自分のためにだけ勉強しているというふうにとられるんです。だから皮肉めいたことをいうんじゃないかと思うんですけど。いろいろいわれても自分もまあ勉強するということでもあるし，どうしても実習生の指導をしなくてはならないし，また患者さんもいろんな層の人がいますからね。そういった面で接するにも勉強しておかないとこれからは看護面だけでは狭すぎると思って，何いわれても苦にしないでやってます。けれども，余分なことしているから，そうそうはそんなこといわせないというようにまわりの人たちから考えられる傾向はあります。

D：私の場合は，途中で勤務かわったんですけれども。私は金，土，日は学校に行っていないから金，土，日は準夜できるから，他の日は避けてくださいといえば，そのように深夜ばっかりとか，きいてくれたんですね，その点とてもうれしいです。だけど，やっぱり，その反面気をつかうというか，疲れたというのは病棟の中では絶対にいわないことにして……。

＜看護分野の中で公認されていないのに，あえて，なぜ，大学に行こうとしたのか＞

L：なぜ大学に行くのかというのはいろんな動機があると思うんです。けれども，看護学校で学んだことが十分でない，もう少し勉強したいという気持も，卒業し，臨床に出てはじめて看護学校に3年間教育らしいものがないと気がついて，大学に入っていきますね。そういうふうに考えていけば，いまの看護教育そのものの問題が解決つく

んですけれども。例えば，いまの看護学校が，大学に移行してそのまま看護大学になったときに，果して看護婦は，他の大学に，看護大学ではなくて他の学部がいろいろありますが，そういうところにいかないだろうか……。看護の求めているものがそういう広い……その辺を話していかないと看護教育にいまの教育制度に……。

なぜ大学に行くのかっていうのは，いろんな動機があるんですけど，そこにかえっていくのではないか。いまの現行の看護教育制度に何か欠陥があるから大学へ行くんじゃないかって気がするんですけどね……。それが4年制の大学にしろとかいろんな場合があって，あちこちに大学，看護大学ができたとしても，看護大学は一つなんだけれども看護学科というのはあるわけですが，そういう人たちは臨床に出てきてもう一度大学に帰るということはないのかなあと思いますけどね。だからいまの私たちの3年間やっている看護教育がものたりなくて大学へ行くのか……。

I：ただ引きのばしただけだったら，ある意味ではただの資格にすぎない。3年を4年にのばしただけならば，私の場合，もう一度行きますね。

＜大学を卒業して看護を選んだ場合と，看護学校入学時に看護婦への道を選んだ場合の立場のちがい＞

外口：調査の結果をみながら，大学教育とは何だろうと考えてしまった。私の場合，大学の4年間というのは「看護のために」という感じではなく，いろんなことをやって，卒業して，看護を選んだ。だけれども，看護学校の場合，18才のときに，看護という職業を選ばされてしまう感じがある。きっと，ちがう立場だったらみえるということもあるので，立場のちがう人間が，ちがう立場のことをいい切ってはいけないのではないかと思う。

とにかく，みんながどんな大学でもいいから通過し，4年間，自分の信条とか価値観を問われたり，人間の来し方の思想の洗礼をうけたりして，自分はどう生きるのか，自分は何処で生きようとしているのかなどをよくわからないけれども考える，そういう期間をもつということで意味があるように思う。

私の場合，大学を卒業してからは，看護をやるために何かこういう勉強もしたいし，ああいう勉強もしたいと，すべてが看護に結びついてくる時期があった。ところが，看護学校から出てきた人をみていると，看護はさておいて，何かどこかに自分が求めているものがあるのではないかと違う方にいく。だから，看護と離れていき，すごく苦しくなるように思う。それで，こんなに苦しくなってまで何でいくんだろうかと思うと，"意地"だと調査用紙には書いてある。意地とか，気力とか，何かものすごいエネルギーをこんなかたちで使っている。それで，やっぱり，基礎教育としては，何でもいいからボサッとすごす，仲間同志で考える，そういう場や時間をおかなければいけないのかなというふうに考えてしまった。

また，人間の成長の段階，発達していく段階の中の18～22才の期間の意味があるんではないかと考えた。いかりをおろして，そのために資源を利用できる何か最初の基盤というものが，人間には必要ではないかと。

桜庭：看護婦の教育そのものが，すぐ職場で適応できるというか，これならこうしなければならないという形になっている。何かすぐ職場と結びついていて，すぐ職場で使える人間っていうような教育をうけてきている。なおかつその進学コースにしろ准看の教育にしろ，もうそういう物事を考えるというような余裕がない。暇があったらすぐ病棟に実習へ行けとかいうような形の教育ですよね。いま頃は，考える看護婦というようになってきているけれども，やはり実際，自分で判断する余裕はないわけです。実習にきている准看の学生にきくと自分でレポート書くとか何とかいうことはできないっていうんです。帰って，体を休めて，学校へ通うのが精一杯だ，といっている。

おそらく，それは准看だけでなく，高看だってかわりないのではないかと思います。

外口：それは時間の問題ですか。

K：看護婦はそういう時間すら与えられていない。ただ飯食って，そしてあとひまがあれば，実習。先生が休みで，じゃあ自習でもしようかと思えば，教務主任が入ってきて，学生に，"いまやっている病棟に実習に行きなさい"とかいったり，すぐ使えるような看護婦という，そういう教育を

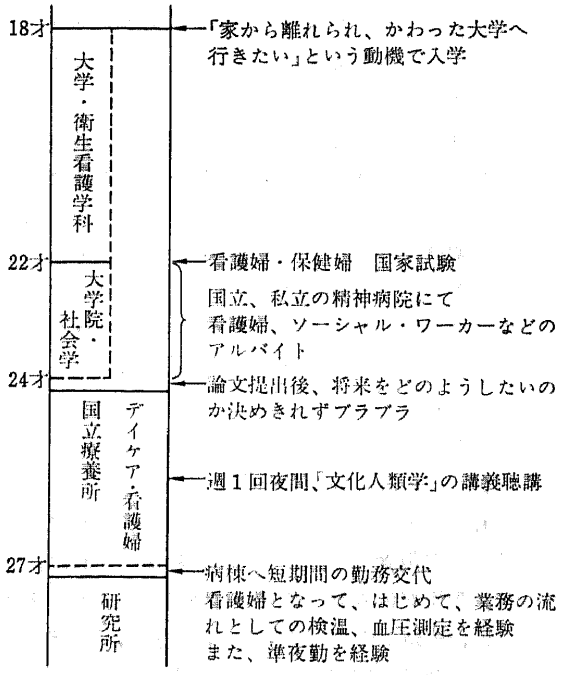
うけてきた。

しかし，これで人間としてのつきあい方が果してできるのかなあと疑問をもつわけです。ここではこうだとか，そのことでボクは思うんです。看護婦は，ひろい意味での文化人類学を勉強してもいいではないか。社会学や福祉学を勉強してもいいだろう。いままで経験してきた看護婦というものの中に縛られていくから，何となく既成に使えるような看護婦でなければ看護婦ではないというような考え方がでるのではないか。

C：私がNさんの「27才，看護婦経験4年目にして，はじめて病棟業務の流れとしての検温と血圧測定をする。はじめの3日間泣きたい思い」(表—2参照)というのを読んで，本当にびっくりした。と同時に，同じような私の感情的な経験というのは，看護学校を卒業して，はじめて職場で仕事をしはじめて1週間のうちに自分は，これを消化していた。Nさんは私とたどり方が，全然逆なんですね。

L：ここに書いてあるんですけどね，学校に入った時点ではどんな職業をするかまったく考えて

表—2　Nさんの経歴



ないっていうんですね。そういう人とはじめっから看護婦になるために教育をうけてきた人と，その辺がちがうんじゃないかなあと思う。

卒後教育や看護教育制度の改革を考えるならば，看護学校を出た人たちがたくさん大学に行くという実態をしらべるということは意味があると思う。つらかったとか，よかったとかいうことだけじゃなくて，もう少し本質的なところまで考えていかなくてはならない。

＜意味がわかればつらさは乗り越えられる＞

外口：私は，最初，ものすごく単純に，看護協会が奨励金を出すとか，とにかく，つらさというか，個人的な努力に帰したくないという感じが強かった。だから，条件をもっと提供するように看護がしたらいい。そういう意見をいおうと思っていた。しかし，こういうのを見ていたら，なぜ，自分が学んでいるかという意味みたいなものがわかれば，案外克服してしまうというか，つらさというのは何をやっても人間にはあるわけだし，そういうつらさを乗り越えるところに喜びをもつものではないだろうか。だから，まわりが全部条件を与えれば，その人がいい勉強をして，与えないからダメになり，だから看護界はダメだ，とはいえないような気がする。いまやっていることと，やろうとしていることをどういうふうに結びつけられるか，どういうふうに看護婦である自分を，あるいは人間としての自分を豊かにしていけるための学びにするか，というような意味がわかれば，つらさっていうのは克服できるし，その過程自体に，その人にすごい意味があるわけだから，と思えてきた。それで，何かあんまり援助の提供のための資料なんて，全然思わなくなってきた。Lさんのいわれたつらさよりももっと本質的なものという意味はそういうことかしら。

E：自分の動機や理想みたいなものがちゃんとしていれば，つらさやそういうものが切りぬけられるのではないかといわれるけれども，いまの看護の仕事そのものがハードワークなんです。夜勤があったりして，休みとかも一定しない。そういった中で勉強するのは，精神的なものだけではやれない。まわりにも勉強しようとする人たちが，結構いることはいるんです。だけど，いまの状態

の中では，毎日は大変だから行けないとか，体の方が大事だから行けないとかいっているんです。その辺がもうちょっと改善されていけばいいんですが，行こうと思っている人は大変多いんです。

＜動機が看護をしている自分に直面して出てきたものであるのかどうか＞

K：ボクではないんですけれども，ある人なんかは准看だから大学へ行かないで進学コースへ行きなさいなんて，総婦長からいわれた人もいますし，やはりそういうふうに，かなり看護というのが看護というものから暗黙のうちに縛られて，自分自身を身動きできなくしているんではないか。どんな学び方をしてもいいんではないかと思っているんです。他の分野の人をみても，いろんな学び方をしているのが普通ではないかとボクは思う。そして，10代とか20代あたりは人生の過程として学ぶ時期だと思う。生涯教育うんぬんなんていうけれども，一番その時期が大切じゃないか。この大切な時期に看護婦というとすぐ使えるといって教育されてしまうこと自体やはり問題があるのではないかなと思うんです。

そういう中で，働きながら学ぼうとする者に対して，いままで不満げに存在していて，大学に行って，何，無駄なことをしてという考え方が，れっきとしてある。それをボクはある程度生涯教育という形で，自分はなぜ勉強するのかということを自分自身で自己分析すればいいじゃないかと思ったりしたんです。自分はなぜ勉強し，追いつかないではいられないかということをね。やっぱり，看護教育自体の方にもの足りなさを感じたように思う。

外口：いろんな学び方をしてもいいのだけれども，その動機に基礎教育の問題を還元してしまわないで，逆に，いろんな動機のもち方に，今度，看護教育をかえなければならない何かが反映されているのではないかと思うんです。

F：そのことに関すれば，看護をやっていて看護の仕事自体に自分が本当に積極的に取り組めるというものを，自分なりに確信できるための一つの手段としていくという場合があると思う。それが選択するということがないうちに3年間看護婦として学ばざるをえないから，なってしまった時点までは選択できないわけです。だから，その後，学ぶ時期がきたときに，本当にいいのだろうか，もっとこれを学ばなければいけないんではないかと思った。そのときに，基礎というか，それが全然ないから，もっと自分に確信をもたせるために大学へ行くと，そういうことがあると思います。

D：私の場合は，3年間の看護教育をいわれるままに受けてきました。卒業して，1年働いているときに，患者さんにはいろんな患者さんがいるし，そこで自分なりに対応していくときに，その人に対応しきれない自分の教養のなさとか，いろんなもの足りなさを感じた。それで，私はあんまり外に出る方じゃなかったので，何かしら本を読もうと思ったんです。その埋め合わせのために。しかし，いざやろうとしても，何もいと口になるものがなかったんです。万事が高校までの教育，看護教育では自分なりにこれから一生勉強していく土台が一つもできていないということで，自分はみじめだった。そんなときに，自分のまわりをみまわしたら，夜間大学に行っている人が何人かいて，その人たちが自分の目からみるとちがっていたんです。他の看護婦と自分が大学に行って，果してそうなったかというと，とても疑問なんですけれども，基本があって行くのと基本がなくていく自分とのちがいの中で，基本づくりっていうそんな気がします。

K：ホンネをいえば，男性だといえば貴重な存在だといわれて，果してこの職場にいていいのかな，安住の地かなと思ったり，看護だと看護だけにしばられてしまうし，大学にいけばまたいろんな道がひらけるんじゃないかなと思ったんです。大学っていう制度の中味そのものについてボクも失望しているんですけれども……。大学の中味うんぬんではなく新しいというか，もっと別の何かを選べるんじゃないかという選択の一つですね。そういうものが大学にはあると思うんです。看護には看護しかないし，われわれには看護しか生きる道はないかなと思って……。

D：大学で勉強することによって，こっちからも患者さんをみていかれるとか，いろんな面ですごくうれしくなった。それは結果において仕事でどうやったといわれると本当に困るんですけど

も。

大学に入っていま4年目で，何一つ勉強としては身についていないんですけれども，大学に自分が求めていたもの全部を与えられるためではなくて，結局は自分で勉強することなんだということがわかっただけなんですけれども。それでもこういうふうに文献をさがしていくのか，こういうふうにやっていくのかというのが自分なりにわかりかけてきたという土台ができたようで，いま考えて学校へ行くっていろいろあったけれども，行ってよかったなあというのが心境です。

E：今，仕事そのものが忙しくて，時間がなくて，試験とかレポートを出すときもなかなか十分読めないんですが，そんなに深くできなくても，いま少し考え方の基礎みたいなものをある程度つけておいて，卒業してからまた勉強すればいいと思っている。

外口：この前，Nさんと資料をみながら気がついたのは，そのことなんですけどね。短大教育でも大学教育でも，何か先にひろがっていて，それで深め，せばめていって，そして，継続教育とか卒後教育とかをやっていくのが普通の分野のノーマルな形ですね。看護の場合は，先にせまくて，そして何か漠然と広げちゃうから，もう一回自分は何をなすかというのと結びつけようとすると，せばめるためにもう一回何かがいる。それがすごくエネルギーがもったいない。ひろがりからせばめるんじゃなくて，せばめてから広げるのはすごく大変なわけです。

私なんかも，出てからせばめていった。"あっ，これだな"と何かそのちがいが看護婦の継続教育と一般の大学を出た人たちの継続教育との間にある。その辺に何か意味があるんじゃないかと，そんなことを討論したんです。

F：いくら何やかやいっても，どちらかというと実技実学というか，そういうものですね。学問的な位置づけというのは考えないし，他の学問との関連というのは，その位置づけをされて教えられていないし，卒業して看護学とそれ以外の分野のかかわりとか看護の位置づけもわからないから，それ以上にすすめていく方法がわからない。だから，ある点について，もっと考えたいとか，やりたいというときには，基礎的なそういうものを求めて大学へ行くということになってしまうと思う。それで，一つは大学じゃないということで，精神的な面でも負い目みたいなものがある。それで逆にいえば，大学に行っておかないと，ものをいうときに視点が定まらなくなって，何となくあやふやで，そこから出発させていかなければならないという弱さがあるんではないかと思います。

＜精神的な負い目とは＞

外口：いまいった精神的な負い目っていうのはなんですか。

F：大学じゃないということ，単に単純にいえば大学じゃないということ以外にないですね。ただ，その大学に大学ということで，教養課程なら教養課程に，そういう土台づけとなるようなものがあるんじゃないかという，あこがれみたいなものが常にあって，看護学校での教養課程と比較して考えてしまう。そして看護を他の職業のように位置づけることができないから，いつまでも青い鳥を追って，看護が主体的に自分で取り組むものにならない。

B：看護学校へ進学する場合には，もう自動的に自分のコースというのは決っている。けれども，自動的な教育をうけて，いったん就職してみて大変なわけです。いろいろ看護学校で学んだことや職場のことを考えますとね。そんなことを考えたりして進学する人もいるでしょうし，大学に進学するためには，いろんなプロセスがあると思う。大学に対して，ただ漠然と行く人はないと思うんです。ですから，動機づけがどんなものであり，その動機づけ全部がどのようにしていくのかという方向で，いろいろ検討していった方がいいと思うんです。というのは，大学を選択するとき，そのときすでに自分で選択すれば苦しいことは承知なんです。それを承知でも大学に行くということですから，それは自己の学習の場で終るのか，そうではなくて，自己学習が間接的に，看護の職業において還元されていくものを期待して，自分の学びにしていくのか，そこら辺をいろいろ検討していった方がいい。本当の一般的な大学卒の免許がほしいとか，あるいは，本当に看護の職場においてそれを活用するために進学していくのかということを。

＜動機は何でもいい，それに取り組む中ではっきりしてくる＞

L：ホンネをはかなくては。いろいろあると思うんです。いろんな形で行く人がいると思う。だけど，いってもなお看護にかえってくるとか，動機がどうであれ看護にかえればそれでいいなんて。だから，動機のホンネを問わないと……。私なんかだったら高卒のときにすでに大学に行きたかったんだけれども，経済的に行けなくて，看護学校を選び，看護学校でも，そして，卒業してもなお自分は大学へ行きたいという漠然とした思いがありました。そう思って行ったけれども，それはまったく卒業証書をとるだけだったかといえば，卒業した時点ではそうではない。いろんなものがついてきた。自分が看護婦をこれからやっていく上にも，やっぱり学んだということではプラスになる。動機は単にあこがれであっても，それをどう生かすかということですね。動機のホンネがはっきりしないと……。タテマエはいろいろあると思うんです。

外口：ホンネと動機とそれから居続けることというのは違ってもいい。"看護"の10月号に書いたんですけど，アメリカのペプロウさんに「なぜ看護婦になったか」と聞いたら，アメリカの社会の中でお金がかからなくて女性が専門の職業人になれるのは，当時看護婦と教師だけだった。そして看護婦の方を選んだといった。その後，しかしながら「なぜなったか」というより「なぜ看護婦であり続けたか」ということの問いの方が重要であるといった。いまLさんがいったことは，そういうことだと思う。なぜ行ったかということとなぜ在り続けたかということとの差の中にその意味みたいなものがあるのかもしれない。少しその辺のホンネを，動機や居続けたことと，やっぱりという感じがしてくるときと……。

K：なぜやめたかというのは，何かキザだけれども……。

おそらく，精神科の中での男性というのは，看護の中での男性というのは，何かいずらいような……。いま残っている人と話してみて，別の方に行きたかったという人が多い。自分自身もやっていて，果してこれでいいのかなあと考えてみたんです。辞めて離れて考えてみると，やはり，看護士でもよかったのではないかと思う。

やめたいやめたい，他へ行きたい行きたいという気持はものすごく強かった。実習場所でも，まわりの人が看護婦さんというと女性だと思うし，男性がひょっこり入ってきて患者が異和感を感じた。そういうのが間接的なものになってやめたい。先輩なども，みんな男のやる仕事じゃないなどといいながらやっているのをみて，いまの道をかえるのは大学へ行くしかないと考えた。でもいま考えてみて，社会的に看護の地位にしろ，看護士の地位にしろ，まあ問題もあるし，低いっていえば低いかもしれないけれども，こういう仕事をやってみて，ケースワーカーのようなのはかっこはいいんですけど，いちばん患者に接する人は看護者じゃないかとなってきたんです。子供に接するにしろ何にしろ，その個々が必要としている人間と接する人，その人が一番仕事でも意見でも強くいえるんじゃないかと。

外口：私なんか，看護婦であるということを自分の生き方と結びつけて行くのに，つまり，自分が看護婦であり続けるために迷い，いろんなことを勉強するとか，何かするたびに確かめていく。だから，自分をより居続けさせるために，学ぶっていう感じもあるんです。だから，そういう何かかりたてるもの，さっきいずらいっていったけれど，看護の中のいずらさというものがかりたてるのではないかしら。

だけど，看護では，いずらさを感じなくなるような職業教育をやるわけでしょう。いってみれば，いかに仕事をこなすことができるかというような。いずらさが人間を進歩させていくかもしれない，どういうあり方でも。条件を全部整えていよくすれば，その人はそこにとどまるっていうんじゃないと思う。看護の場合，安易なレベルで"あなたこのくらい"っていうことで安定させる力がすごくあって，それをふりほどくのがすごく大変なわけです。迷うことはいいことだとか，揺らしながら自分の中で揺れるものを確固としていくために学んでいくという，揺れる教育というものをしていかないとダメなんじゃないか。自分がおびやかされるような教育を……。

内科にいたとき，自殺未遂の患者さんが救急で

きたとき，私なんかドキドキして，アンプルを切っても注射器に液がなかなか入らない。だけどもうひとりの看護婦はパッパッとやれた，顔色をかえないで。自殺して，そこで生きようとしている人を前にしたとき，圧倒されることをなくすような訓練，つまり，いつも迷わない，常に一定の態度で接することを学ばされてしまう。迷わないで楽々すぎてしまうと，そんなに自分が勉強しなくてはいけないと動機づけられなくなってしまう。何にぶつかっても平気になるような，そんな気がするんですが。

＜病院の中に看護のリーダーがいれば……＞

J：私の場合は常に看護婦から逃げようというわけでもないんですけれど，できたら離れたいという気持をずっと強くもっていました。先程，誰かがいったどうしようもない，看護婦しかできないんだというひらきなおりじゃないんですけど，そういう気持にようやくなってきました。これから，はじめてじっくり看護ができるのかなあというふうな気持です。いままで私もわりとあちこちまわってきたんですけれども，そういうことが，いろいろな意味で役に立ってくるのではないかという感じがしています。それで，なぜ大学に行ったのかというと，やっぱり職場の中で自分というものが本当に出せないというふうな感じで，そういった自分の考えていることとか，そんなものを実際にやりたいという気持が強くて引き出していこうなんて思って，別な仕事ということで，私の場合は行ったんですけれども。何かこう看護の中で離れられない，自分が離れることができなかったかもわからないんですけど，何か魅力とするものが，あるんじゃないかと。いまこの頃になってきてじっくり感じるようになって，はじめてもう一度あらためて看護とは何だろうみたいな感じで，取り組んでみようかなあと思っています。

私が思うには，もし自分が最初勤めた所で，病棟の中で充実して本当に満足してやっていたら，大学とか，そういう道にはすすまないで，たぶん，ずっと看護をしていたような気がします。だからいま病棟でも感じるんですけれども，病棟なんかで働いているときに，よりよい先輩にめぐりあえればと思います。でも，大学を卒業してふりかえってみるときに，寄り道していることが広い意味で将来還元されてくるんではないかなあと漠然と考えているんですけれども。

L：私は卒後教育と関連させて，看護のリーダーが，スタッフの自分たちが3年間習ってきたことではどうにもならないとか，大学へ行かなければやれないんじゃないかといういろんな悩みみたいなものを聞いてくれ，そして看護婦を教育できるような人たちがリーダーシップをとってくれれば，大学へ行ったりしないのではないかと思う。そうできるリーダーが看護界にはいない。そこで得られなければ，はじめてあなたは大学へ行って勉強しなさいとか，そういうふうな形でまたあってもいいんですけれどもそれさえない。まあ自分の病院がそうだから他も全部だとはいえないんだけれども，そういう病院もあるかもしれないけれども，いまの看護界，病院の中でリーダーシップをとっている人の中で，それを吸い上げることができる人は少ないように思う。それができてくれれば，院内教育とか，そういう形で大学へ行かなくても得られるものがあると思う。

J：だから，なぜそこまで私たちが走って求めたかという動機の中にどんな意味があるかというと，どうしても現状を打破するためのワンステップの形になるんでしょうね。自分が直面している問題は，看護が好きとかきらいに関係なくあると思うんです。現実の問題として。だから，それなりにその人がやっている方向性みたいなもの，そこの先輩が2，3年でも4年でもいる人たちが，バックアップして動いていければ，私なんかの場合，大学に走ったか，その辺が充実していれば，私の場合はたぶん行かなかったのではなかろうかといま逆説的に反対に思いますけど。

H：いまの看護教育というのは，私たちが大学をうけて学びたいと思うような内容ではなくて，むしろ，例えば直接組織はちがうんで，同じことをいえないんですけど，私のいる病院の場合だと，看護教育の中で，具体的に，例えば筋肉注射ができないとか，看護技術をしない，経験しない人が多いわけです。ところが，実際の病院に行った場合には，そういうことができないでは困ることで，むしろそういうような，ある意味で技術的なものがどんどん入ってきて，本質的な卒後教育

のプログラムなどはもっていないように思う。

J：特に卒後というのは，すごく不安定なんですね。もういろんな意味で技術もわからないし，患者の接し方もわからないっていう感じで，私なんかの場合，すごく不安定でしたね。

外口：私は，この調査研究を10才ちがう看護婦と一緒にやっているんですけれども，20代のときに先輩と一緒に仕事をし，乗り越える相手がいるということは本当に幸せなことだと思う。私なんか本当にいなくって，何かいつも自家発電みたいだった。そうした存在がないということは苦しいことだったですね。確かめられないし，このまま突っ走っていいかという感じがつきまとってきた。だけどまわりからいろんな要請があるから，他の分野だったら指導者をえてやる時期に全エネルギーを出して突っ走っている。そして，はっとしたら後輩と一緒にやる時期で，求めているうちに求められている側になっていた。

若いときの何かこうありたいというのを体現してくれている人というか，何か自分の求めているものを少しでも具体化していくというんですか，人格高潔な人間でなくていいですけども，何かそういう人を見たときに，自分も全力をあげようと思うような人が看護界には少ない。そういうとき，看護学校の教師はモデルにならないし……。だから，その不幸というものはすごく大きいと思う。

結局，私なども，いつも確かめ合う仲間がいないとどうしようもなくて，看護研究会というものを作ったりして，いろんなことを確かめあったりした。外に出て学ぶこともあったけれども。確かめあえば位置づけられるから，学ぶことに足をとられない，ここで学んだことは何かというように，位置づける何かをもっていないと，足をさらわれてしまうような危険が，看護婦継続学習の学び方の問題としてあるように思う。

3—3　第2回の話し合いの中から

第1回目の話し合いは，主として動機という点に焦点があてられていた。しかし，大学に行こうとした動機というものは，大学に学び続ける中で，あるいは，職業生活の中でふり返ってみたときに，意味がでてきたりするものであろう。そこで今回は，大学で学ぶということが「いまにして思えば，自分の個人の生活史の中でどのような時期で，どんな意味があったのか」，いいかえれば，「いまふりかえってみれば，あの経験は何であったか」という問いかけをそれぞれが自らにしていえることを参加した11名の方々に語ってもらった（この話し合いは昭和51年3月6日に行なわれた）。

そのか中ら，アンケートの自由記述欄に，「もっと考えるナースが多くなってこないかぎり，看護はいつまでたっても，機械的処置におわれてしまう技術屋のような気がする」と書いていたSさん，「看護婦を続けていくべきなのか，別の職業についた方がいいのか……」と迷い続けているIさん，大学卒業後，医療ソーシャルワーカーに転職し，「再度看護婦として勤める意志はまったくない」と書いていたYさん，この3人の大学で学ぶにいたった生活史を紹介する。

A　准看護婦から1つのルートとして正看護婦の道を進み，その自らの学習のあり方への疑問から大学に学ぶことを動機づけられた若い看護婦。

「もっと考えるナースが多くなってこないかぎり，看護はいつまでたっても，機械的処置におわれてしまう技術屋のような気がする」というSさんの場合，

現在，○○中央病院に勤めております。生活史の中で明治学院大に学んだことということなんですけど，私はちょうど大学に学んで2年終ったと

ころなんです。

一番最初のことからいうと，中学を卒業して准看学校へ2年行って，卒業したら次々とみな先輩も勤めながら定時制高校に通うからというような形で，レールに乗っているようなつもりで，4年間とにかく行ったわけなんです。そうしたら，准看があって正看というのがあるから，上に行くのは当然だという気持があったから，4年間で卒業して，それから進学コースへ行きました。

この前の話し合いの中でも，准看が実習にきて考える力がなく，何でも機械的にやることが自分たちの仕事というようなことがいろいろでてきたと思うんです。事実，その通りでよくわかるんです。実際，医者からいわれたことをさっさとやってしまう。そういうのが看護の仕事というようなイメージを植えつけられてきた。実際に臨床に入って，看護というのはそういうものじゃないと考えさせてくれたのは，働き出してだいたい2年目くらいのときに，たまたま一緒になった主任さんだった。それが動機づけになって，看護というのはこんなにいいものか，というようなことを改めて考えさせられて，必死になって3年間看護をやって，結局，短大に入ったんです。短大に入って，勉強の方はできたんですけれども，卒業する頃になって，果してこのまま看護婦として臨床に入ったときに，どういうふうな感じで勉強していくかなと考え，断片的な知識のつめ込みではどうにもならないということに気づいた。もっと勉強したいから保健婦学校に行こうか，助産婦学校に行こうか迷ったんですけど，それだったら結局，それほどかわりはないだろうという気持で，もう少し考え方を系統だてて考えられるようになりたいということで，大学に行きたいと思いました。興味の方からいくと哲学みたいなものをやりたいと思いましたが，二部ではかぎられているということで，看護に関係あることだったら教育学とか，心理学とか社会学だとか考えた結果，社会学を選びました。

自分としては，大学に入った動機もそうなんですけれども，とにかく基礎教育をつみあげていくことと，ものごとを系統だてて考えられるようになりたいと，入って2年たったんですけれども，入ってみたら臨床にいて3交代やって，それで学校へ行くということは前も定時制生活をやっていましたので，自分ではそれほど苦痛だとは思っていません。何とかやってこれたという感じなんですけれども。また昨年の終り頃から，このままで大学を卒業してどうなるのかなっていうような気持になって……。結局，自分で勉強していかなければどうにもならないということはわかっているんですが，繰り返して……。卒論は，医療とか看護のことと結びつけていきたいといろいろ迷ったんですけど，一応，リーダーシップのことについてということで勉強していこうと思っている段階です。

B　臨床の中で，看護婦としての行きづまりと，日常業務の中に埋没しそうになる自分を打破するために，大学進学を動機づけられた経験5年余を過ぎた看護婦。

「看護婦を続けていくべきなのか，別の職業についた方がいいのか……」と迷い続けているＩさんの場合。

Ｉと申します。総合病院の内科の病棟にいます。

私は，自分で望んで看護学校に行ったんですけれども，卒業当時，勤め出してすぐ，とってもいやになりまして，看護婦の職業をやめたいという気持がすごく強くて，いろんな意味で1人でやっていけないというか，経済的に大変だったので，一応2年間勤めたんですが，その後，1年間養護教員養成の学校へ行きました。そこで，大学の雰囲気にふれてどうしても大学へ入りたいという気持が強くなって，それで東京に出てきまして，やっぱりやる気があるということで大学へ入りました。

私は看護婦の仕事のよさというものが，本当に私の中ではまだつかみきれていない。勤めてから7，8年になるんですが，5年くらいつかめていなかった。いまはようやく自分なりの看護婦としての“あじわい”というか，その中にあるものというのが，こういうものではないだろうかということが，言葉ではなく，実感としてようやくつか

めるようになったんですね。そういうものを，じゃあ，自分の中で，どういうふうに具体的にしていくかということになると，自分がいままでの学校教育の中でかなり断片的に，いろんな看護とは全然関係のない一般教養とか，看護から離れて自分が4年間学んだことの中から，何かずっとかね合わせて練りあげていくというか，そういうもので看護を深めていきたいし，そうせざるを得ないのではないかということで，改めて自分が4年間学んだことを自分のしている仕事の中でかね合わせてやっていけるというか，そういうものかなとかなり漠然としていますけど……。

4年間学んだことが基礎となってつみあげられていくんじゃないかなとようやくなってきました。また，私たちが看護婦として患者に接していくなかで，亡くなった患者さんをみたり，家族の反応をみたり，私たちの感じ方とか，そういう中から拾いあげてやっていきたいなと思う。その中から，私たちお互いに看護婦同志が，患者さんによい看護ができるか，小さいことなんですけど，見つけていきたいと考えまして，4年間はっきりと系統だってはいないけれども，そういうものがいくらかでも私の中に入っていったんではないかと考えて感じられまして，できたらそういうものを深めていきたいなあと感じています。

C　看護婦でありたいと思い続けながらも，看護に失望し，自分を生かす道としてソーシャル・ワーカーを選んだ元准看護婦。

「大学卒業後，医療ソーシャル・ワーカーに転職し，"再度看護婦として勤める意志はまったくない"」と語っていたYさんの場合。

現在，神奈川県のある保健所で医療ソーシャル・ワーカーをやっております。明治学院大ですけれども，44年に卒業しました。65年度生です。

今日，私はここにくるときに，苦労しながらともに学んだということで，大変気楽ななつかしい友人にあうような気持でここにきたんですけれども，前回出席の方々の経歴をみますと，私は大変かわった経歴じゃないかという気がしますので，私の経歴を話したいと思います。

私は熊本の国立のハンセン氏病の療養所ですけれども，菊池恵楓園の卒業生です。准看護婦なんですけれども，あそこで一生懸命学びました。卒業しまして高看に行こうと思い，京都の病院に勤めたんですけれども，働きながら学ぶということで，卒業と同時に定時制高校に入りまして，夜勤しながら行っていたんです。私は看護婦という仕事に対して生きがいをもっていましたし，将来この仕事をやっていこうという熱意にもえていたんですけれども，実際，現場でやっていく中で，看護という業務に疑問を感じまして，途中で高看に進学するということをはっきりと断念しました。定時制2年の頃に，私は大学に行って社会福祉を学ぶという決心をしまして，それから途中で東京に出て都立の高校にかわりました。やはり，東京でも夜勤をしながらこれは施設ですけれども，定時制高校を卒業しました。卒業してすぐに大学に入ろうと思ったんですが，夜勤をしながら大学へ行くということに対して，定時制高校の頃，4年間いやというほどつらさみたいなものを感じていましたから，果してあと4年間夜勤しながら大学へ行けるものかどうかということで，精神的にも肉体的にも疲労を感じ，私は望みを達することができないのではないかという弱気になりました。卒業した後，仕事も学校もやめ，1年浪人みたいにして田舎に帰りました。田舎に帰ったとき，親を説得して1年間勉強して，熊本からもう一度東京に出て，社会福祉を学ぼうと思った。ですから，私は転職をめざして大学に入学したのです。

ですけれども，転職をめざすということも，根本は看護婦の仕事を通して，自分は何とか患者さんのために役に立とうということなんで，看護婦の仕事と切り離しがたいものである。

大学に入るときに，昼間の社会事業大に入りたかったんですけれども，働きながら学ぶということを高校4年間で身につけていますし，経済的にも自分でやっていかなければならないということだったので社会事業大をあきらめまして，明治学院大の社会福祉をやろうとういことになった。そうしたら，また高校4年間と同じことをやらなければならないという重みがあったんです。夜勤をしながら学校へ行くということがこたえていましので，看護婦をやめて他の仕事をしてでも夜の大

学へ行こうと思ったんですけれども，大変幸運にも，大学まで歩いて20分か25分の研究所で看護婦としての仕事がみつかり，寮に入れていただいて，後で，寮は勉強できないということで，近くのアパートに引越しましたが，私は大変幸運だったと思っています。

看護婦として，研究所の血液銀行の方に採用されましたので，夜勤もなく，4年間，しかも大学の近いところで私が何年も前から望んでいた条件がそのまま与えられまして，感謝しながら学校へも仕事にも精を出したわけなんです。ですから，私の記憶では，学校は1日の遅刻も欠席もしなかったと思うんです。あるいは，病気したときがあったので，1日か2日熱を出した日に休んだと思うんですが……。とにかく，出席率は抜群で，成績は間に合わせみたいなものになったけれども。

大学卒業と同時にはじめからの望み通りに病院のソーシャル・ワーカーとして働きたいと思っていたんです。いろいろと病院へ行っても，ワーカーのあきも望むところがなくって，先生に相談しましたところ，秋口に神奈川県○○市の採用試験がありまして，その採用試験も一般職ではなくて福祉職ということで試験を受けて入りました。長い間の念願だったんですけれども，公衆衛生の中でワーカーとして働かせていただいて今日にきているわけなんです。

4. 考　　察

以上，本調査研究の過程をふりかえってみると，第一段階の「アンケート回答のまとめ」から第二段階の「自由記述欄に表現された思いの把握」にすすみ，そこからさらに「回答者との直接の話し合いでの確かめあい」へとすすんでいっている。従って，それぞれの段階で考察したことが，次の段階の展開の軸となっているといえる。特に，第一段階および第二段階における調査研究過程で報告者自身に感じとれたことが，その後の直接の話し合いの中で報告者の「問いかけ」となっていることがわかる。

そこで，本項においては，それぞれの段階で得られた資料への一般的な考察ではなく，ここまで調査研究を進めてきた中で，報告者が，気づかされてきたことを中心にして，当初の意図とてらしあわせながら述べてみたい。すなわち，報告者自身の「看護婦の継続学習のあり方への期待」，と，「看護における基礎教育と現任教育のあり方」に対する考え方みたいなものについて，この調査研究過程で確かめることのできたことについて述べてみたい。

4—1　看護の場における継続学習のあり方について

看護が“人と人との働きかけ”が強調される仕事である以上，それを担う看護婦がさまざまな人々とさまざまな体験の中で“より学びつづけたい”という思いをたえず刺激され，自らの成長をかりたてられていくのは必然であると，報告者は考える。そうした学習をする場や手段はいかなるものであってもよいと思う。それは，無自覚であれ，自覚したものであれ，それなりにその人の仕事ぶりの中に反映され，還元されるものであると考えるからである。

しかしながら，報告者がこの調査研究を思いたった動機でもあるのだが，同僚たちの学習の求め方に危惧の念をいだかざるを得なかった。すなわち，「果たして，この人達はその時，自分の行なっていることの中から，学習を動機づけられたものなのか，看護の仕事をしている自分に何かを感じていったん離れてみつめてみようとしたものなのか，つまり，今，自分のやっていることに“いかり”をおろして，何かを求めようとして，外に出ていったのか」ということ

が，長年，気にかかっていたことであった。「今，自分がやっていることを否定して，場や形を変えることで何かを得られるのではないか」という期待のしかたをしてはいまいかと気になっていたのである。その人たちの悲壮なまでのファイトに驚嘆しながらも，一方では，その足場のもろさみたいなものを感じてこわい気がしたり，もったいない気がしたりしてきた。

やはり，看護婦にとっての本来の学びは，日々の仕事の中での体験を自分の中に意味づけしていけることである。それゆえ，日常の仕事の場が“教育的環境”であることが望まれるわけである。そのための要件は，誰によってどのように満たされていくものなのか，ほとんどの人が“看護の中で自分を生かしきれない苦しさ”を披瀝していたし，卒業後，ケース・ワーカーになって働いている人でさえ，座談会にかけつけてきて，“自分が活かせるような仕事のしかたができれば看護にもどってもいいと思っている”といっている。また，“もし，そうした方向づけをしてくれるリーダーに恵まれていたらああした形で進学する必要性を感じなかったかもしれない”と，看護の場での成長への“渇望”を語った多くの人がいた。そしてまた，この調査研究によって，改めて，“進学したこと，通学しつづけたことは自分にとって何だったのか”をつきつめて考える機会を与えられ，はじめて，自分のやってきたことをふりかえることができた，そしてそのこと自体に多くの学びがあったと確認しあうこともできた。看護にいかりをおろして，主体的に学びの場を拡げていけるようになるためにはまず，「看護婦が看護の中に自分の力の不足を感じ，可能性を発見できるように方向づけされること」，「個々の看護婦がそれ相応の自己発揮の場を与えられるとともに，その中で自分の力の限界を直視できるように支持されること」，「自分自身が看護婦である仲間をどう見，何を期待し，その人たちとの中で自分はどんな役割りをとり，何をしているのかを確かめあえる場を保証されること」，そして「昨日よりは今日，今日よりは明日と，どんな小さなことでも自分が知ったり，できたりすることが実感として得られるような働き方ができること，そうした働き方を期待される職場にあること」などがあげられる。

他分野において学習するということを，より意味あるものとするには，まず，自分の分野において経験していることの意味を自覚していることが基盤となるはずである。

先の報告(1)において，この点について報告者は，次のように，その基本的な考え方を述べた。「……こうした人々の成長・発展への意欲的取りくみを，ただ単に他分野との交流の中でその分野のフレーム・ワークに満足させてしまうだけに終わせずに……」とのべて，その受身的な姿勢に不満を示した。そして「……他分野の人々がそこに発見している以上のものを，私たち看護婦は確かに目撃しているのだということに気づくことが先決であろう……」と，看護婦の他分野への貢献が求められていることの自覚を促している。すなわち，人が生まれ，その生を閉じるまでのすべての健康生活現象にある個人にかかわっている看護婦は，周辺の人間科学の諸分野にとって，より具体的なき

めの細かい問題を提起することができるはずである。看護婦が自分の問題をもちこんでいったときにはじめて，他分野から学ぶことができるし，他分野の人々も看護婦から学ぶことができるのである。こうした相互学習の場の一つとして，大学のキャンパスがあるといってもよい。そうした意味からすれば，なおさら，看護の中で自分のやっていることや同僚のやっていることを直視して，その意味を自らに問い，看護における価値や信条を互いに共有していく必要のあることは明らかである。

4—2　看護基礎教育のあり方について

看護基礎教育の問題をぬきにして，現任教育のあり方や継続学習の方向づけを語ることはできないといってよいほど，そこにはさまざまな問題が山積みして，個々の看護婦の成長を阻み，看護職の発展にひずみをもたらしている。このことはいい古されてきたことである。しかしながら，ここでは，「人の一生にとって，18歳前後のもっとも多感な自我の確立期を，どのような場で誰と出会うかということの意味の大きさを考えあわせながら，その時期にあたる看護の職業教育は何を意味するのか」について，検討してみたい。すなわち，“いかなる時期にどのように看護の道を選んだのか，選ぶことのできる素地の中で自から選んだものなのか，他の要件に付随して選ぶことになったものなのか”については，第三段階での話し合いに参加した人々の“生活史の中で，看護基礎教育過程にあたる時期，ならびに，夜間大学に学んだ時期はどのように位置づけられるか”についての資料とともに，「看護基礎教育のあり方」を問い直される思いがする。こうした観点から，看護分野における基礎教育と継続学習との関連を他の一般のそれと比較してみると，きわだった特徴のあることがわかった。

看護においては，看護学校への進学を選んだと同時に，まったくといってよいほど看護婦になることが想定されていること，また，外側から，例えば，社会経済的などの条件によって付随的に看護の道を選ばされていくということである。このことは，卒業後の学習のあり方に多大な影響を与えている。一般の短大以上の高等教育においては，学校での基礎課程は幅が拡く，その後にせばめていって，職業を選ぶというのが普通であるが，看護においてはほとんどが，基礎課程ですでにせばめられており，その後に自力で拡げていこうとする努力を要され，そしてふたたび絞っていって，看護を選び直すということになる。しかし，こうして選び直すことのできる人は，ごく少数の，そうした条件に恵まれた，すぐれた努力家であって，そこにいたるまでに多くの人々が困難に直面して挫折し，迷い，看護から離れていっているのである。

報告者など，幸いにして，先人の力によって看護の分野で，看護を自ら選びとっていく教育の場に恵まれたわけであるが，その立場の違いが，話し合いの中にも所々に出てきて，迷い考えさせられることが多くあった。例えば，大学教育への期待のし方へのずれなどは，一般の大学教育のあり方への再検討が云々されている現在，幻想とも思える大学という学問の場への憧れを見聞きしたとき，頭を打たれた思いだっ

た。それは話し合いの中においても，“ツキがおちた感じ”，“卒業するときには何かがあると思ってきたが，卒業してみたらこれからと看護に腰が坐った感じ”，“土台作りにすぎなかった，土台ができたからこれからは必要なとき，どこにも勉強にいける感じ”，“スタート・ラインに立った感じ，やっと先が開けてきたような感じ”などといった言葉は報告者には重くひびいた。このいわば，看護教育についてまわる不当といってもよいほどの“負い目”のようなものは，いったい何なのであろうか。これを“負い目”としてとらえるのではなく，各種学校という枠を与えられながらも，一方では，看護が自前で拡げられるだけ拡げて中味をつめこんできたこれまでの歴史を，明らかにしていくことによって，大学教育のあり方や医療福祉行政のマン・パワー政策のあり方を根本的に問う力をもつ存在として，看護教育がおかれている状況をとらえ直すことはできないのであろうか。そのためには，何からどう始めることが必要なのであろうか。こうした価値の転回を迫るには，看護の場で行詰り，もがいている人がもう一歩，先に行ける足場を個人的努力にのみ，依拠しないで，誰でもが動機づけられたときにいくことができる条件を組織的に保証していく必要があろう。

しかし，なぜ，あえて困難を承知で学びつづけるのかをたえず自らに問いつづけなければならなかったがゆえに，また，あんなにもこがれた大学教育はこんなものであったかという思いをのりこえようとしてきたがゆえに，さらには自分と同じ問題に直面しながら学びつづけている仲間に出会うことができたがゆえに，今のそれぞれが在ることを認めることができるのではないかと思う。“困難さをのりこえるには，外側から条件をととのえられることよりも，その困難にたちむかう意味を求めつづけたという内的な支えであった”という言葉のもつ意味は深く大きい。看護教育の改善が叫ばれ，短大化，大学化の要望が強まっている中で，そこにひそむ安易さや形だけの変化にとどめられる危険性を明らかにできる検体としての存在意義に，看護婦として働きながら夜間大学に学んだ人々の１人１人が自覚してほしいと期待する。“看護教育に一般教養がもっとなければ”とか，“大学にすれば……”といったものではなく，問題が何かを警告できる人々のはずである。そのような力を期待するのは，報告者が，たまたまその条件を得ることができて看護を選んだという立場からくる身勝手な期待なのであろうか。今後の厳しい課題である。

5. おわりに

以上，本調査研究においては“働きながら大学に学ぶ看護婦がもつ問題を通して，看護婦の継続学習のあり方について，いかなる提言ができるか”という課題を果たそうとしてきた。

残念ながら，報告者の力不足のために，この課題を十分に果たすことはできなかった。しかし，当初の意図とは異なった方向での問題の深め方を発見することができたことは，今回の調査研究における大きな学びであった。

看護教育問題研究会の分担研究としては，本報告をもって終了することとなったが，今後は，調査の対象者として協力していただいた方

々の中から，特に強い関心をよせて話し合いを重ねることのできた何名かの人々を共同研究者として迎えて，新たに研究を計画している。従って，関係者の方々のより卒直な御意見，御批判を得たいと切望する次第である。

なお，本調査研究をすすめるにあたって御協力いただいた対象者の方々，座談会に参加していただいた池田節子さん，宮沢三和子さん，その接渉にお力添いただいた明治学院大学の大島貞夫先生はじめ学生部や同窓会の方々，また看護協会調査研究部の岩下清子さんに心から感謝申し上げる次第です。

看護基礎教育の目標と内容

薄井　坦子*

1.　研究課題への基本姿勢と方法

本研究は，日本看護協会・教育問題研究会の研究課題である「大学・短大における看護基礎教育」の分担研究としてとり組んだものである。この研究課題をどのような姿勢で受けとめ，とり組んできたかについて，先ず述べておきたい。

今日看護界には，看護教育は高等教育として位置づけられねばならないと考えている人が多いようである。その理由としてよくあげられるのは，医学の急激な進歩についていけない，社会の急速な変化に対応できない，人間相手の仕事であるから，などである。しかし，これらの主張は，看護教育をなぜ高等教育のレベルに引きあげなければならないのか？　という疑問をもつ人々に対し，必ずしも説得的ではない。なぜならば，これらの理由は，現象としてあらわれた事実を指摘しているだけであって，その事実を解くための“教育とは何か”が欠落しているからである。

“看護教育をどのようなものとして確立しようとしているのか”について，看護の専門家集団から発言するのであるならば，看護教育を看護教育という次元でとりあげるのではなく，“教育とは何か”の観点に立ち，その教育一般からみて，看護教育がどのような特殊性をもつのかを説明できなければならないし，さらにそれを行なうためには，何よりも看護そのものを原理的に説明できなければなるまい。もしこのとり組みを欠くとしたら，われわれはいつまでたっても拠って立つ土台を据えることができず，従って，看護に関わるさまざまな問題をまともにとりあげることはできないであろう。なぜならば，看護そのものについての原理的な理解がなければ，同職者間においてさえ問題の本質についての一致した見方を期待することはむずかしく，従って，多くの主張が乱れとんで問題の解決の方向を見定めることすらが至難のわざになってしまうであろうからである。

では，ものごとを原理的に理解するためには，どのような方法でとり組むことが要求されるであろうか？　いうまでもなく，原理はその

＊千葉大学